

年間第20主日

第一朗読 エレミヤ 38・4-6、8-10
第二朗読 ヘブライ 12・1-4
福音朗読 ルカ 12・49-53

2025.8.17 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

日本の教会では、毎年8月6日から8月15日まで平和旬間として、平和について考えまた祈る、そういう時期を過ごしています。

その時期が終わったばかりの今日の福音の中では、イエス様が「わたしは平和をもたらすために来たのではない。むしろ分裂だ」(ルカ 12・51 参照)とおっしゃる。もちろん、わたしたちが祈り求めている平和とこの福音の中でイエス様が「みんなが思っている平和をもたらすために来たのではない」と言われるその「平和」は意味が違うということは明らかなわけですが、イエス様がもたらすとおっしゃっているその分裂、この福音書の中では父と子、それから母と娘、姑と嫁というふうに、世代の対立としてその具体的な例が上げられています(ルカ 12・53 参照)が、これは今の日本の社会でも深刻になりつつあるという、そういう意味での世代間の利害の対立のことを言っているのではありません。

むしろルカの福音書では、「イエス様こそが全ての歴史の中心なんだ。イエス様の前とイエス様の後では決定的に違う。イエス様がいらっしゃってからもうこの世の完成の時の段階に入っているんだ」、そういう考え方が根底にあるし、またイエス様に会った弟子たち一人ひとりの人生も「イエス様に会って自分たちの人生が大きく変わった。もうそのそれ以前の出会わなかったときに戻ることはできないんだ」という、その体験を反映しているのが福音書です。という意味で、イエス様の前と後っていうその違いの対立を表しているのも、それは年齢とか世代間のギャップの話とは全然違うということになるわけです。

でもそのイエス様がこの世に来られて、そしてその対立の先に与えようとしている「平和」とは何であるのか。それはイエス様が宣教の活動の間、またエルサレムへの旅の間になさったことの中に見ることができます。イエス様は全ての人と交わる

——その当時の社会の中でないがしろにされている人、また排斥されている人、そういう人と繋がることを通して、実はその人たちを神の民の中に再び迎え入れる、またその人たちの声を他の人々に伝えるために、エルサレムに向かわれたと言っても良いわけなんです。

そういう意味で「わたしは平和をもたらすために来たのではない」とおっしゃる「平和」っていうのは、現状がそのまま保たれていくっていう現状維持を支えるための一つの方策としてご自分の名前が使われるということを拒絶されるということなんだと思います。「この人たちさえ黙っていれば全てがうまくいくんだ。あなたたち、あるいはあなたさえ今までのまま端っこで我慢していれば全てが今まで通りうまくいくんだ」っていう、その考え方を拒絶されると言うて良いのではないかと思います。そういう平和は、ある意味では力がある人たちにとっての平和であって、そこから排斥された人にとっては平和ではないからですね。

そういう意味では、同じようなことが現代のわたしたちの社会においてもあるのではないか、またわたしたちも本当に誰かを黙らせる、あるいはそこにしわ寄せが行くということを通して今の享受している安定があるのではないか、ということに絶えず敏感になっていくということにも招かれているんだろうなと思うわけです。イエス様の時代の話だけではない。これは今においても、「この人たちさえ、あるいはあなたさえ黙っているならば全てが今まで通りうまくいくのだから」というような考え方は一人ひとりの中にもやっぱり根深くこびりついているのかもしれない。イエス様は、そうではない。そういう排斥された人たちの声を人々の心の中に届ける。まさにその方なんだということを忘れてはならないわけです。

一方で、そういう本当の意味での平和を実現するっていうつもりで、特定の自分に関わるあるいは自分が特に心を痛めている、関心がある人たちの声は代弁するけれども、それがために、その人たちを援助するあるいは助けていく過程で他の人々の尊厳とか他の人々の命や権利をないがしろにする、踏みにじってしまうということも起こりうることですね。正義とか平和の名のもとに自分自身の解決しなければならない心の中にあるわだかまりや怒りというものを正当化してしまうことを通して他の人を攻撃してやまないという、そういう誘惑は絶えず付きまとう。そういうことにもわたしたちは注意しなければならないんです。誰かを助けているつもりであって、他のそ

れ以外の人を踏みにじってしまうということは、やはりイエス様が目指している平和ではないということになるんだろうと思います。

わたしたちは、平和っていう名のもとに、あるいは平和を実現するという名のもとに、しかし誰かを攻撃している、暴力に過ぎないそういう行動と、それから、平和を維持するっていうその建前の中で何も問題を見ない、そういう——何て言うんでしょうか——怠惰と、その間の細い道を通っていかなければならないんだろうと思います。暴力とそして怠惰の間にある真の平和の道。それは、愛以外にないわけで、イエス様のものの見方、そして振る舞い方をわたしたちの中にいただくことを通してのみ実現していくと、わたしたちは信じているんだろうと思います。

今日、このまさにイエス様がもたらされるその分裂を恐れることなく、しかしその分裂の先にあるまことの平和への希望をいつも持ち続けることを通して、他の人を平和の名のもとに攻撃してやまない、そういう暴力と、平和の名のもとに何も変わらないってということだけを求めるっていう、その怠惰との、その間の細い道、愛の細い道をたどることができますように。

イエス様ご自身がわたしたちの心の目となり、そしてイエス様ご自身がわたしたちを導いてくださるその恵みを絶えず願い続けることを通して平和の希望を新たにす、その思いを持ってこのごミサで互いのために恵みを願い合いたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>